

第15回 武蔵野市第五期基本構想・長期計画策定委員会 議事要録

■日 時 平成23年11月1日（火）午後7時3分～午後9時7分

■場 所 市役所802会議室

■出 席 山本泰委員長、見城武秀副委員長、
小竹佐知子委員、作部径子委員、前川智之委員、
松本すみ子委員、会田恒司委員、井上良一委員
(近藤康子委員、欠席)
事務局（企画政策室長、企画調整課長他）

1. 開 会

2. 議 事

(1)「第五期長期計画 計画案」に寄せられた意見について

・資料1「計画案に対する意見聴取状況」の説明

委員長：無作為抽出市民ワークショップⅢは、何人抽出して、実際の参加者は何人か。

事務局：1000人を無作為抽出し、さらにⅠとⅡの参加経験者149人に声かけした。1日目は99人（新規69人・参加経験者30人）、2日目は89人（新規60人・参加経験者29人）で、参加率は約1割だ。

委員長：他自治体の状況はどうか。1割の武蔵野市を上回る場所はあるか。

事務局：事前に調べた範囲では、大体5～6%、少ないところは1.5%だった。当市を上回る場所はない。土日を割いての参加という点も考えると、武蔵野市民は意識が高いといえる。

・資料3「無作為抽出ワークショップⅢ グループ発表意見」の説明

<ワークショップについての感想>

委 員：①ワークショップはいい対話方法なのに、計画案を読んできていない市民もいて、なかなか議論が深まらない感じがした。

②今はその気になれば自分で幾らでも情報をとれるのに、情報が伝わらないという意見が多かった。皆いい意見をいうが、評論家にとどまって、実際にコミュニティに参加してくれるのか、行動につながるのか疑問を持った。

委員長：とにかく参加して、計画案を読み込んでいる人、いない人、具体的意見をいう人、抽象的意見をいう人、さまざまな人の意見を聞くことが、市政に興味を持つ1つのきっかけになる。

委員：①スタッフの進行が巧みだった。配布資料がかわいらしかった。

②市民がどの分野の議論に参加するかは受付で初めてわかる。関心のない分野に当たると抵抗もあるが、多様なことを学べる機会でもある。意見を出すという本来の目的と同時に、意見を聞いて学ぶ効果もあった。

③施策の実行にかかるコスト等、行政についての知識を得られた。

委員長：長期計画それ自身が、職員研修でもあり、市民の学びと参加のきっかけづくりでもある。

事務局：今回の長計の大きなテーマは広報広聴だ。ワークショップで、広聴として意見を聞き、広報として情報を持ち帰ってもらうというのは、他の部でも活用できる広報広聴の手法であり、各部の企画担当者に投げかけた。相談があればノウハウを提供したい。

委員長：長計に「広報広聴の拡充」とあるが、具体性がないとの意見もある。こうした手法を施策の中にも書くと具体性が出る。市職員と市民がテーブルを囲んで顔を合わせることは大切だ。市がちゃんといろいろなことを考えて行政を進めていることがわかる。

<今後検討すべき問題点>

事務局：本日示した「寄せられた意見」、これから持たれる市長との意見交換、教育委員会との意見交換で出た意見、この3つをうまく斟酌しながら修正作業をしていきたい。

委員長：各分野の担当委員から、これからの主たる検討事項と思われるものを挙げてほしい。

(健康・福祉)

[地域リハビリテーション]

委員：「地域リハがわかりにくい」という意見が全般的に非常に多かったが、名称は変更せず、行政としてそれを説明していく努力をしていくということでもいいと思う。

事務局：市もその方向だ。健康福祉総合計画でも地域リハはいい続けていくことを確認した。

委員長：市民は学者ではない。地域リハは、概念として、またやることとして何が重要かという説明が必要だ。

委員：健康福祉部では、厚生労働省が考えている包括的なケアよりもっと広い、障害者総合福祉法の概念も含めたもの、要するに障害者の権利条約が批准できることも含めた体制整備と戦略ととらえている。

[施策のタイトル]

委員：タイトルがわかりにくいという意見は取り上げて検討する必要がある。

事務局：今のもので了承された人も多いので、余りガラッと変えると、つながりがわからなくなる。

委員長：どの分野も、中身を詰める過程があるので、少し幅広い表現にしてある。中身を詰めた後、これまでとの整合性に留意し、表現的に絞ったものにすればいい。

事務局：基本施策2「暮らしつづける」、基本施策3「生活をおくる」、基本施策5「生活を継続する」は、同じことを違う言い方にしていると受け取られたかもしれない。それぞれに意味が込められ、広がりがあるという説明があればいいのではないか。

委員長：角度のずらし方の筋が必ずしも読めないところが幾つかある。その点の検討も必要だ。

〔「人材」という表現〕

委員：「高齢者、障害者は地域にとって大切な人材だ」という記述について、「人材」に抵抗を感じるとの指摘があった。我々の長期計画では、高齢者、障害者を「お客様」扱いするのではなく、地域の大事な担い手ととらえている。そのキーワードとして「人材」を使ったが、この言葉に抵抗を感じるのも理解できるので、検討したい。

(子ども・教育)

[記述の仕方]

副委員長：①5つの公立保育園の民間移管が決まり、その後の公立保育園のあり方を心配される声があった。この辺をもう少し丁寧に記述したい。

②あそべえと学童で、「運営の一体化」が意味するところについて、舌足らずなところをしっかりと説明していく必要がある。

③桜堤児童館、旧泉幼稚園跡地について、この計画案で考えていることが市民にきちんと伝わっていないところを少し丁寧に記述したい。

事務局：全体の分量が決まっているので、全面的な加筆は避けてほしい。

委員長：各部分のバランスもある。野放図に書くとバランスがおかしくなる。舌足らずな部分は補うとしても、基本的に1文入れたら1文削るぐらいの気持ちでやってほしい。

また、余り具体的に書き過ぎると、個別計画の検討や現場の作業を縛ることになる。

事務局：具体化は個別計画に譲っていただいたほうがいい。

委員長：記述の密度、書きぶりについて、分野間の整合がまだとれていない。どの程度のバランスで書くのがいいか、分野横断的な大きな判断が必要だ。

[語尾について]

副委員長：「運営を一体化する」と書くのか、「運営の一体化に向けて検討する」と書くのか。どちらにするかで全く変わってくるので、語尾の問題も慎重に考えていかなければならない。

委員長：全体を通してもう一回チェックしたほうがいい。検討事項ばかりだと、何のための計画かわからない。どうしても「検討」でなければならないか、個別の問題ごとに判断して修正したい。

[インクルージョン教育、少人数学級]

副委員長：インクルージョン教育、少人数学級について意見が出たが、教育委員会の見解を聞いて、考え方、項目として入れるか入れないか、入れるとしたらどのように入れるか等、必要な検討を行いたい。

(文化・市民生活)

[社会教育の扱い]

委員：社会教育の必要性をおっしゃる方が多かったが、市が社会教育をどう考えているのかよくわからない。

委員長：社会教育については、市民性教育の趣旨でとらえている人、基本的人権である学びや文化は学校を出ても保障されなければいけないという趣旨でとらえている人、両方いる。社会教育の考え方をはっきり出すと、そこに突っ込むことになる。

事務局：事務局もそこを考えて、使わないほうがいいだろうとしている。

委員長：どう考えるかはもう一度議論したい。「社会教育」という言葉は、愛着のある市民も多いようなので、皆さんを安心させるために置いておいてもいいかなと考えている。

[コミュニティ]

委員：コミュニティが一番意見が多かったが、余りにも大きい問題で、検討しても今書かれている以上は書けないのではないか。

委員長：地域のつながりは、さまざまな活動やニーズの中で自生的に立ち上がってくる。計画案では地域のつながりの種となるものを至るところにまいたつもりだ。あとは、職員、議会のメンバーがそれを読み取って次の事業の形なり中身をどのように考えていくかだと思う。

[施設（西部図書館）]

委員：施設に対する市民の事情、お気持ちは理解するが、この先 10 年で見ても、拠点主義のままがいいのか。

委員：受けとめ方を文言に起こすのが私たちの仕事となると、盛り込まないとするのでは意見をいただいた意味がない。少し厳し目の意見があったように思うが、それも酌み取って、「ご意見は聞いた」という姿勢を示せる文言にする必要がある。

副委員長：「検討」だらけでは困るというのは確かにそうだが、西部図書館については、「歴史資料館として再整備する」と言い切っているのか、いま一度検討しなければいけない。

委員長：いずれにしろ修文は最後にちゃんと行いたい。

(緑・環境)

[放射能に関して]

委員：放射能に関する意見は、ざっと計算して 44%の方がおっしゃっていた。一度しっかり練り直していただきたい。放射能以外の項目は、追加や具体性を持たせる等の文言の工夫、都市基盤とかぶるテーマの整理をすればいいと思う。

放射能問題では、市の対応窓口を一本化してほしいという意見が多く挙がった。今の行政のシステムでは、ワンストップでないほうが正しい情報が伝わるということがあるかもしれないが、放射能に対して新しい体制を組む日本という全体を見たときに今のままでいいのか。10年後、15年後に放射能課のようなものができていくのかどうかかわからないが、不安ゆえに窓口一本化を望む市民の気持ちを念頭に置いて、計画案での扱いを検討してほしい。

(都市基盤)

[自転車問題・安全安心]

委員：自転車問題については、我々は今コンビニで 800 円のごみ袋を買っても、高いなどは思うが、文句をいってやろうとは思わない。そのような、武蔵野市民として住んでいるのだからというライフスタイルのレベルまで自転車とのつき合い方を昇華する議論があっている。今はそこまでの議論ができていないと思う。

安全安心もキーワードだ。国が放射能で「安全だ」といっても、みんな全然安心していない。逆に「安全ではない」といわれても安心しているものも世の中にはある。安全と安心を結びつけるものは信頼であり、信頼は、市民と行政のうまいコミュニケーションの中で醸成されていくものだと思う。

委員：自転車については、計画の中でも、工法、期限、鉄道事業者・商業者・市の役割分担も含めて、このような形でやるということは全部出しているし、講習会も開催しているが、市民から多くの意見をいただくのは、広報が足りないということだ。

委員長：東電のように工程表を示すことは、信頼醸成の1つの仕組みだと思う。

委員：目標に到達することよりも、そこに行くまでの過程で行政と市民がどのくらい時間をかけて、どう歩み寄ったかというところに、市民にとって真にかち取るべきものがある。自転車問題はそのプロセスがまだ薄いと思う。

副委員長：武蔵野市は、南北方向の移動に自転車を用いたほうが便利な地域が思いのほか広い。うちの子どもは今、中一だが、30～40分で調布駅まで行く。一たん明大前まで行くより早い。その意味で、自転車こそ広域連携が必要だ。互いに連携し合って道路整備や環境整備をすると、てきめんに効果が上がる。

委員：交通ルールの問題もあるので、自転車は武蔵野市だけで取り組んでも余り意味がない。

委員長：自転車という切り口で、利便性、環境、意識について勉強会やワークショップをするのもおもしろい。市民教育のいい教材になるかもしれない。

3. その他

委員長：11月8日の作業部会ではどのように議論するのか。

事務局：各分野を担当する委員と職員で、各分野及び全体にかかわる前半部分のたたき台をつくらせていただき、それで議論していただく形を予定している。

委員長：そのとき、あわせて条例がどうなっているかも聞かせてほしい。

事務局：了解した。

委員長：最後に、屋上屋を重ねるようだが、市民の意見はものによってばらつきがあり、計画案の文章は一応の落としどころを見てつくっている。どこに落としどころを持っていても反対する人は必ずいるので、これをずらすと、今度は別の人が反対する。落としどころを動かすのは綱渡りのところがあるので、よく考えなければならない。余り軽々には動かさないものになっていることはもちろん事務局もわかっているし、委員のほうも十分ご理解いただくことが大切だ。今回は最終の策定委員会で、11月17日（木）の予定だ。

——— 了 ———